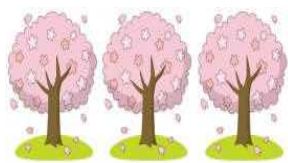


高取小だより

令和7年2月18日



三本桜

第34号

ふかく考える子 あたたかみのある子 がんばりのきく子
2月の目標： 勉強の苦手を克服しよう

実におもしろい

今から約15年ほど前、福山雅治さん主演のテレビドラマ「ガリレオ」がフジテレビ系列で放映されていました。福山さん演じる天才物理学者・湯川先生が難問に直面すると、「さっぱりわからない」「実におもしろい」という台詞を口にし、当時流行したことを覚えています。



湯川先生は、「全ての現象には必ず理由がある」との信念をもって、科学的に立証可能な事象を頭ごなしに否定することをしません。また、「ありえない」という発言に対しては常に否定的な姿勢を示しました。そして、スポーツや、趣味で行っている料理も数学的・理論的に解釈しようとする理屈屋でもありました。ときには、大がかりな実験装置まで製作して検証をしていきます。失敗を繰り返してもあきらめることなく、納得のいくまでデータを集める姿は「追究の鬼」と言えます。

さて、子どもたちが「わからない」というサインを発したときに、私たち大人はどういう対応をしているのでしょうか。「どうしてわからないの?」「どこがわからないの?」という問いを投げかけてはいないのでしょうか。

そうした言葉を投げかけることで、「わからないこと」は「いけないこと」というメッセージを送ってしまっているように思えます。私自身のこれまでもを振り返っても、反省の思いしかありません。

人間は本来、知的好奇心をもった生き物です。だから、数々の発見や発明をして、現在のような高度な文明社会を築いてきたのです。子どもたちもいろいろなことに興味や関心をもっています。学年が下の子どもほど、「なんで?」「どうして?」と質問してくるものです。

わからないことやできないことに対して、「やってみよう!」「どうやったらできるかな?」と、好奇心を掻き立てるような指導、授業がしたいものです。わからないことがわかるようになったり、できないことができるようになったりすることは、絶対にうれしいことです。つまり学ぶことは「実におもしろい」はずです。

湯川先生のように、わからないことを楽しめるような勉強ができれば、とても素晴らしいことではないでしょうか。「わからない? だったら、わかったら楽しいだろうね! おもしろそうだね!」と言って、一緒に考えてあげたいですね。